

図 8 - 5(C) 排便 (排便の知らせ) : 年齢 (歳)

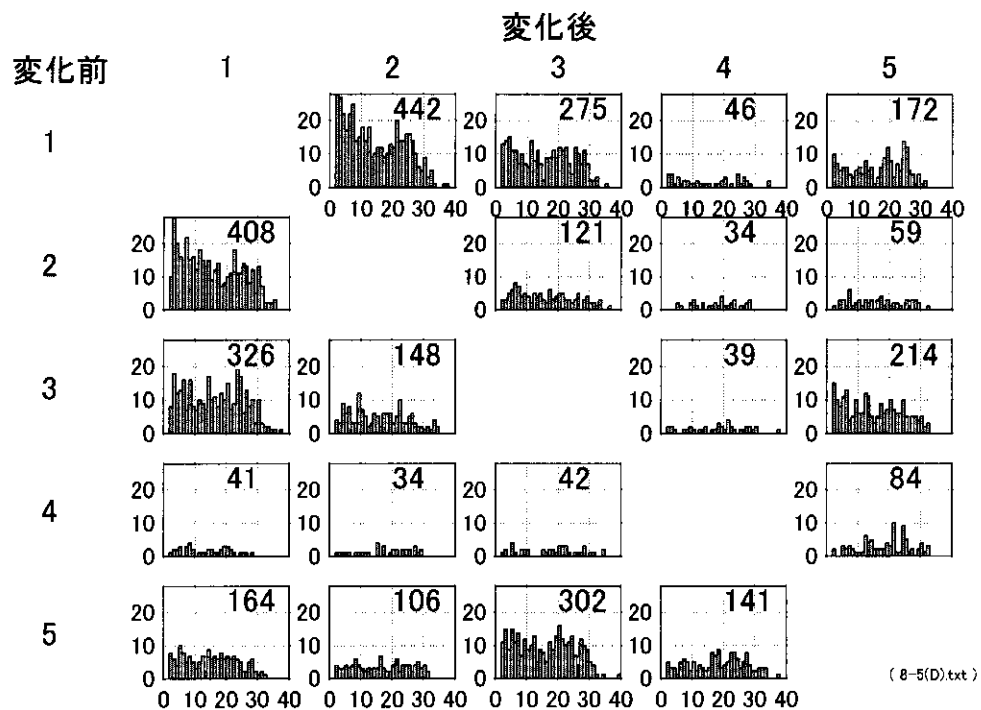


図 8 - 5(D) 排便 (排便の知らせ) : 変化発生までの入所期間 (年)

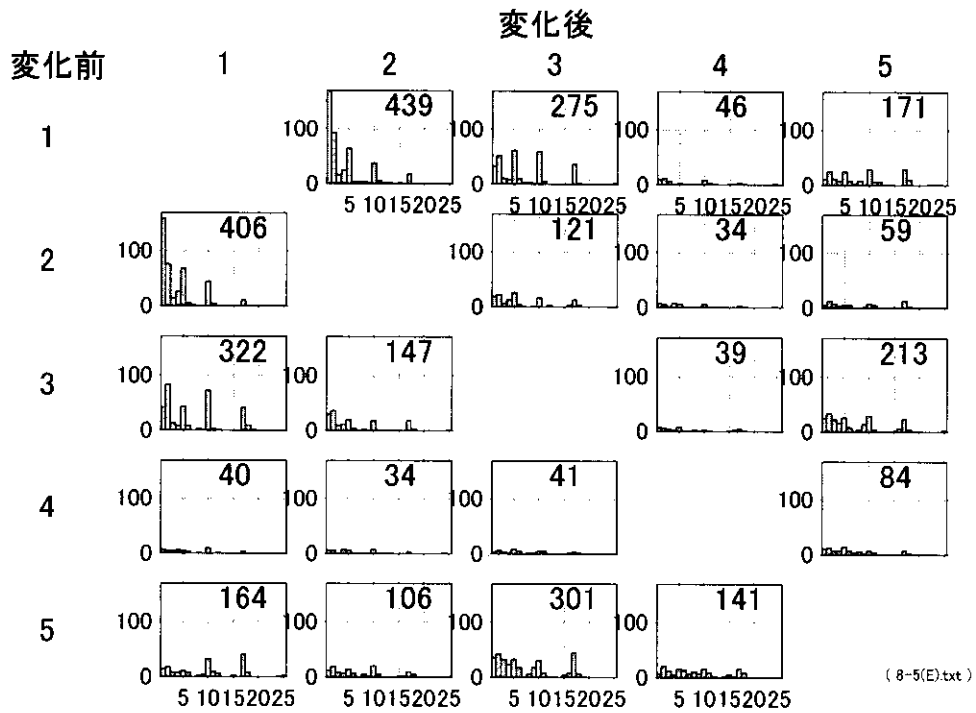


図 8 - 5(E) 排便 (排便の知らせ) : 大島の分類

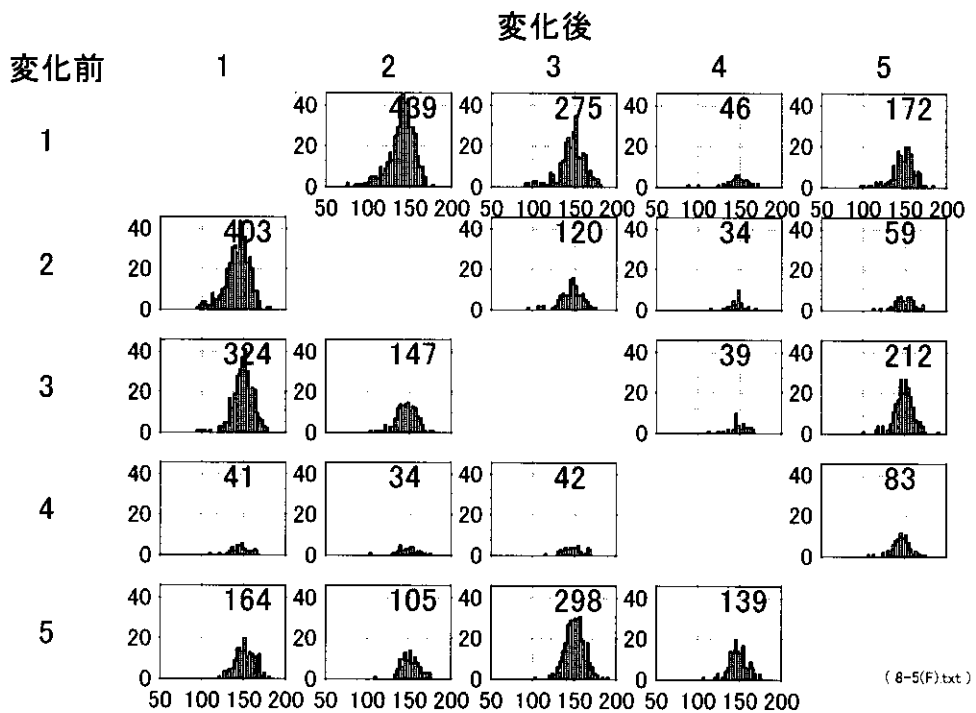


図 8 - 5(F) 排便 (排便の知らせ) : 身長 (cm)

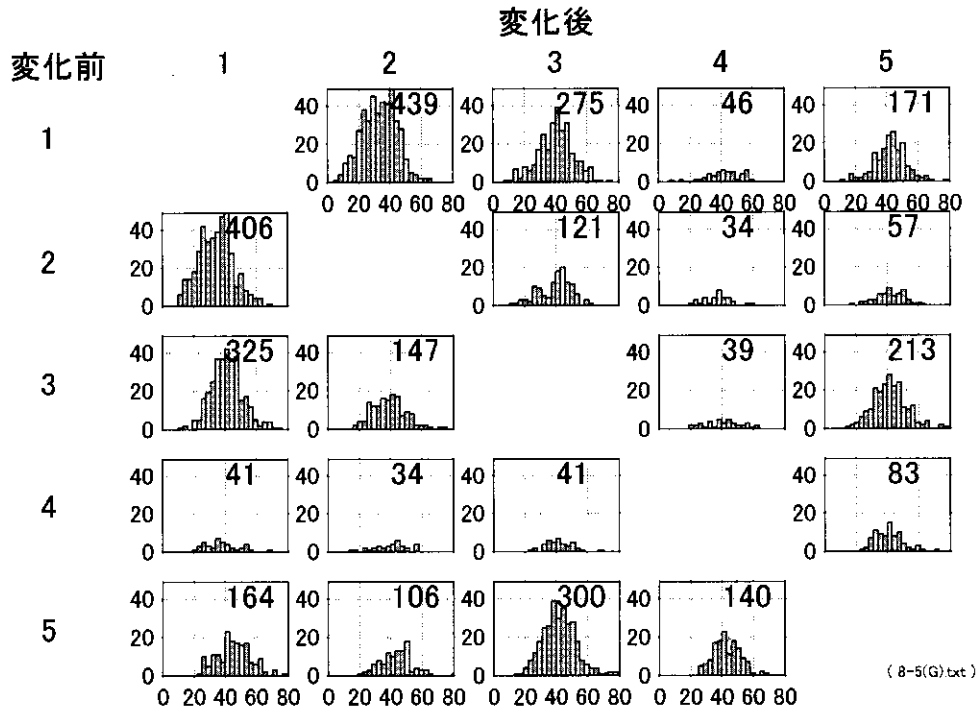


図 8-5(G) 排便 (排便の知らせ) : 体重 (kg)

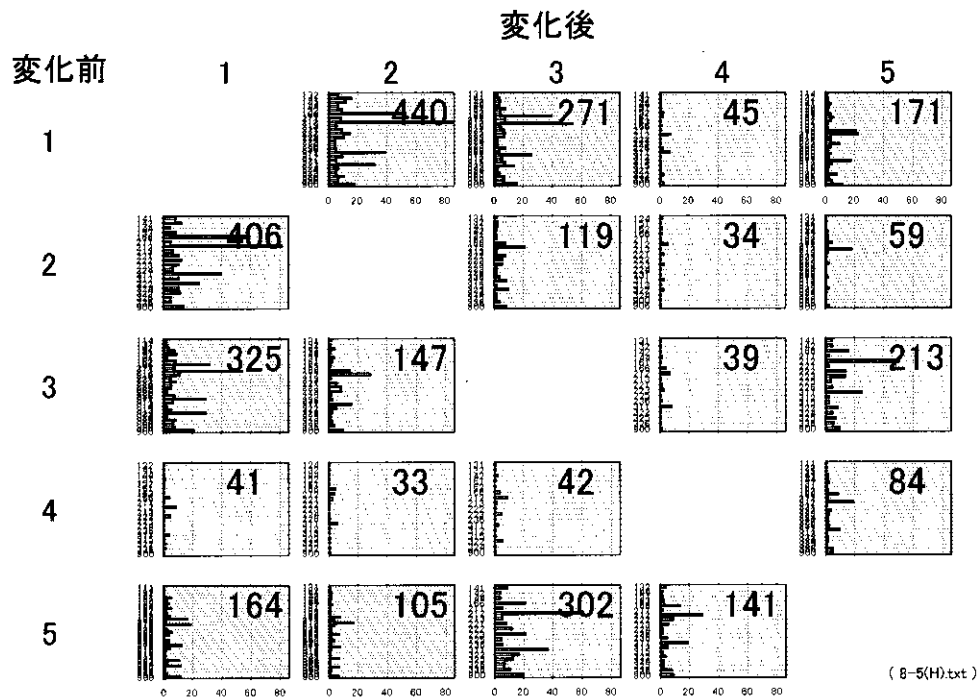


図 8-5(H) 排便 (排便の知らせ) : 主要病因

8.6. 排便（排便の介助）

■改訂版■

| | |
|---|----------|
| 1 | 全介助 |
| 2 | かなり介助が必要 |
| 3 | 必要に応じて介助 |
| 4 | 介助不要 |

<図 8-6 (A)～(H)>

全体：対象症例数 8587 の中で不変群 6879 名を除いた、1708 名（19.9%）に変化がみられた。改善は 1075 回，退行は 1438 回発生し，改善は退行に比べて少なかった（改善/退行：-25.2%）。また，改善と退行の和（2513 回）を変化を起こした症例数で除すると，変化が平均で 1.47 回発生したということになる。改善が多くみられた水準は，1 群→2 群（411 回，改善回数の 38.2%），2 群→3 群（308 回，28.7%），3 群→4 群（160 回，14.9%）であった。一方，退行に関しては，2 群→1 群（522 回，退行回数の 36.3%），3 群→2 群（342 回，23.8%），4 群→3 群（267 回，18.6%）の変化が多くみられた。いずれも介助度の高いものが多い傾向にあった。

年齢：改善群で多い 1 群→2 群と 2 群→3 群はともに 33～35 歳であった。退行で多いのは，2 群→1 群は 39～41 歳，3 群→2 群は 36～38 歳であった。改善は 30 代前半をピークに認められ，退行の介助度の低いものは 30 代半ばまでにピークがあり，介助度の高いものは 30 代終わり頃にピークを迎える傾向が示された。

日常生活動作（排泄）のまとめ：

重症児の日常生活行為の排泄（排尿・排便）からみると，改善件数より退行件数の方が多く退行しやすい項目とみることができる。年齢的には，30 代半ばまでは改善をみるものの，40 代に入ると加齢によると思われる退行が顕著となる傾向がみられた。また，退行していくものには，20 代後半から 30 代前半にかけて退行していくグループと 30 代後半まで改善を認めつつ，40 代で退行していくグループに大きく分けられる傾向がみられた。高い年齢での退行群は，比較的高いレベルに達した後の退行となっており，機能の低いレベルでの退行は，より若い時期に退行にいたることが示された。

| | 変化後 1 | 2 | 3 | 4 |
|-------|--------|-------|-------|-------|
| 変化前 1 | 6037 名 | 411 回 | 178 回 | 10 回 |
| 2 | 522 回 | 162 名 | 308 回 | 8 回 |
| 3 | 256 回 | 342 回 | 566 名 | 160 回 |
| 4 | 27 回 | 24 回 | 267 回 | 114 名 |

対象症例数 = 8587 名
 不変症例数 = 6879 名
 変化症例数 = 1708 名

改善変化回数 = 1075 回
 退行変化回数 = 1438 回

(8-6(A).txt)

図 8 - 6(A) 排便 (排便の介助) : 全体

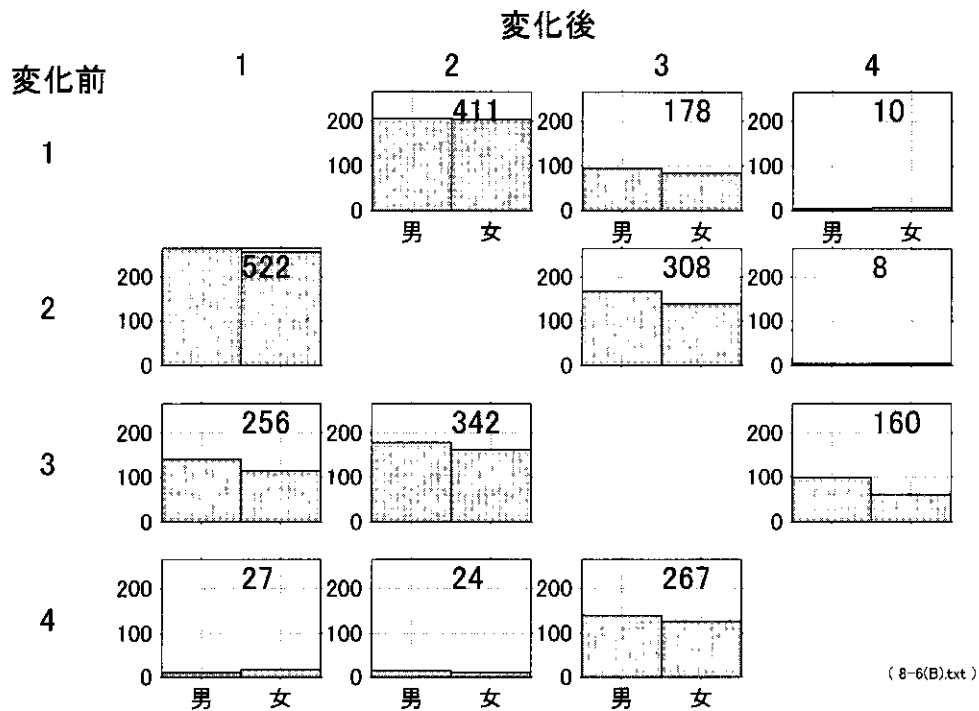


図 8 - 6(B) 排便 (排便の介助) : 性別

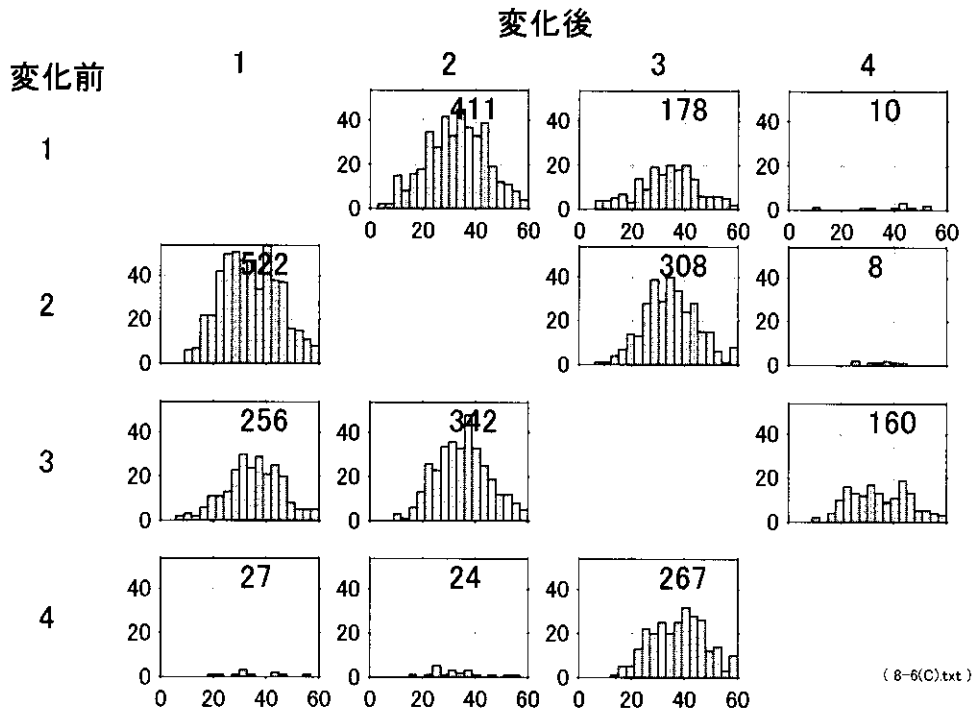


図 8 - 6(C) 排便 (排便の介助) : 年齢 (歳)

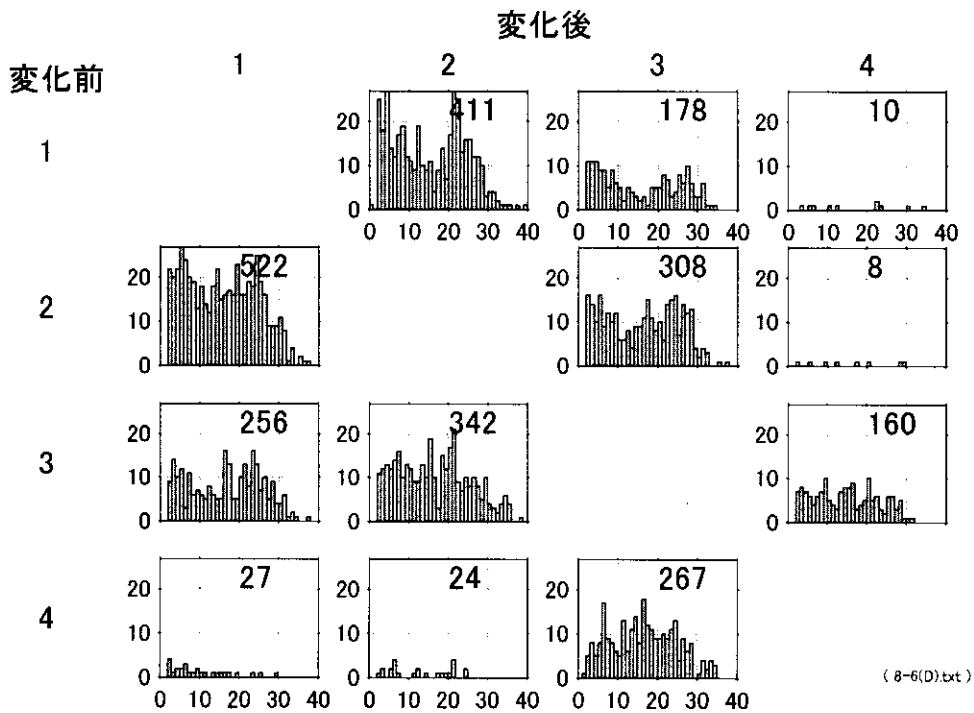


図 8 - 6(D) 排便 (排便の介助) : 変化発生までの入所期間 (年)

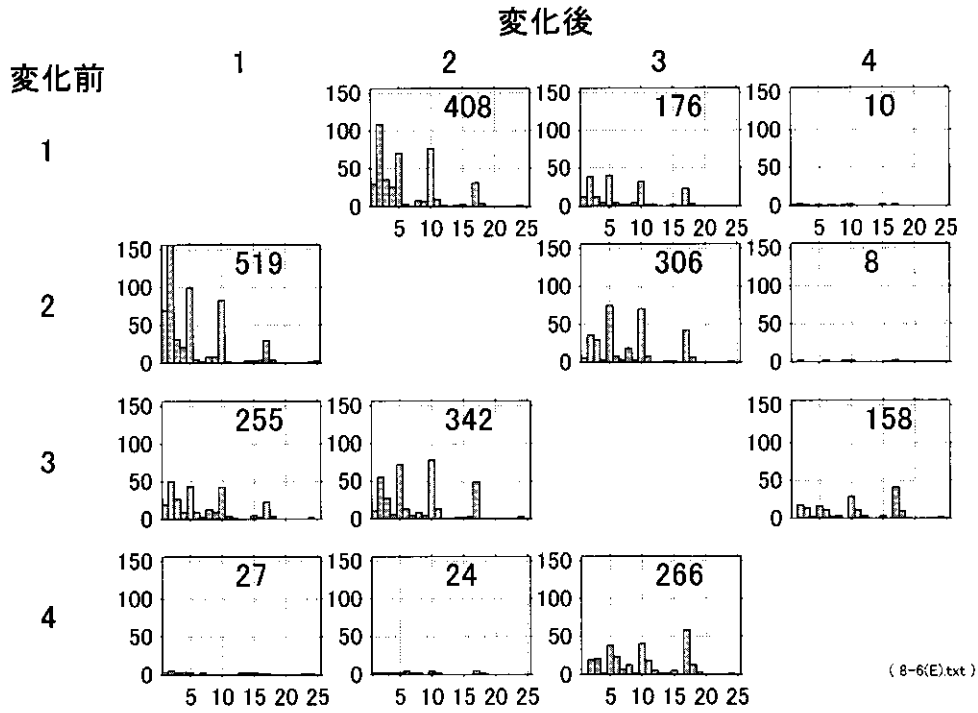


図 8 - 6(E) 排便 (排便の介助) : 大島の分類

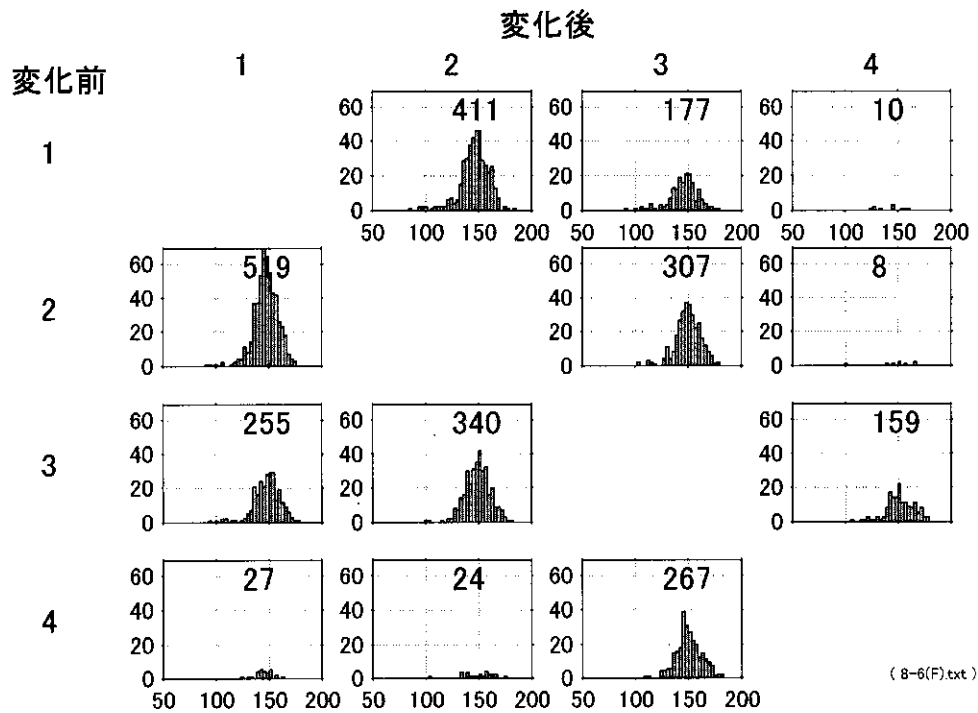


図 8 - 6(F) 排便 (排便の介助) : 身長 (cm)

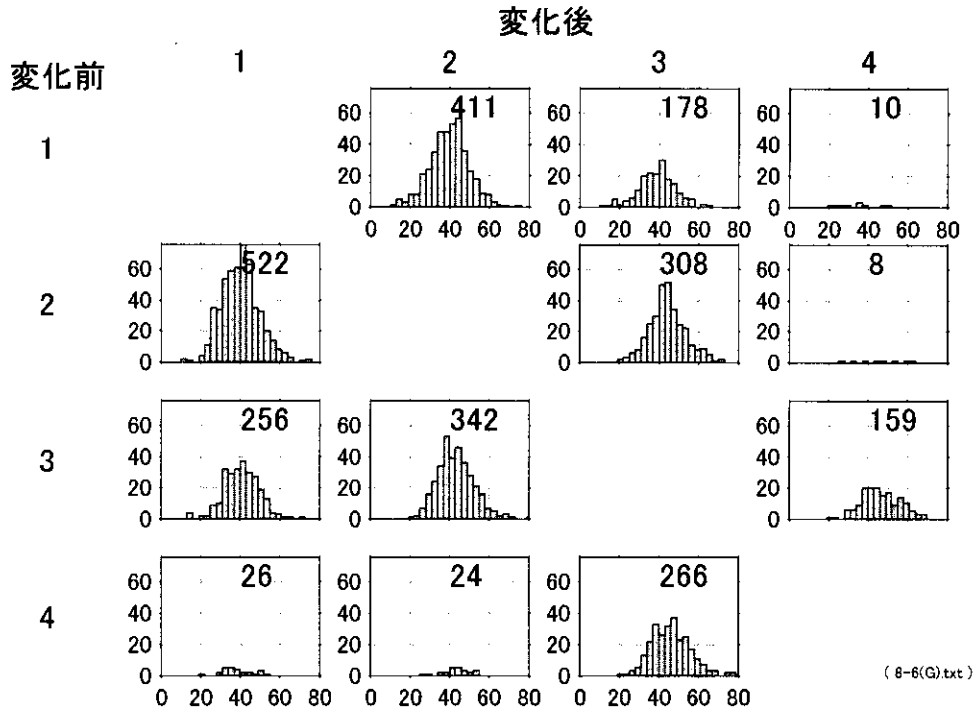


図 8 - 6(G) 排便 (排便の介助) : 体重 (kg)

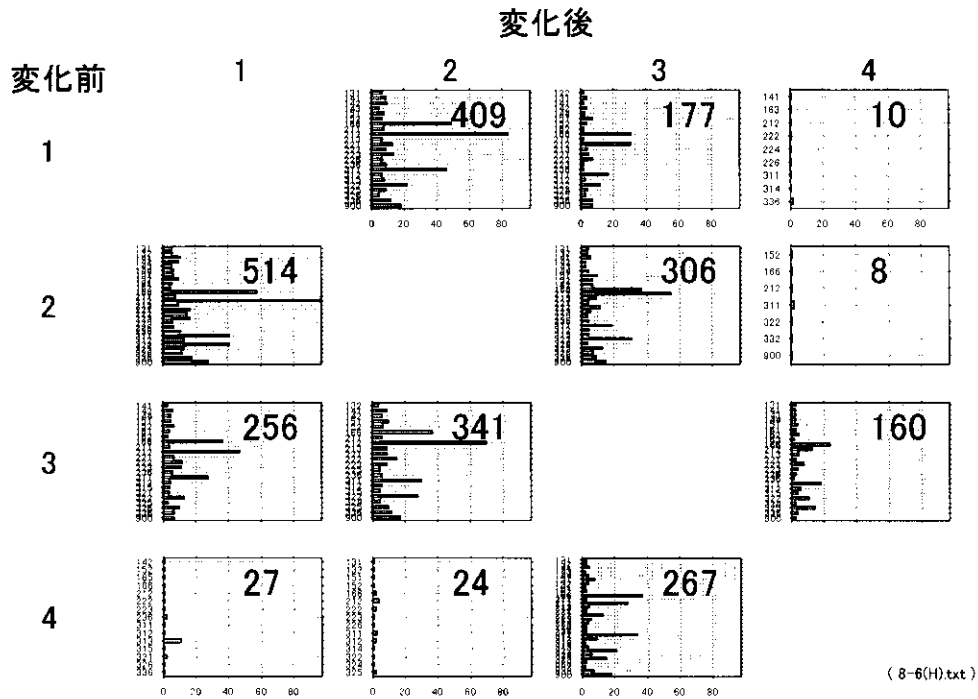


図 8 - 6(H) 排便 (排便の介助) : 主要病因

9. 日常生活動作（食事）

9.1. 口の開閉

■改訂版■

| | |
|---|--------|
| 1 | 非常に困難 |
| 2 | やや困難 |
| 3 | 容易にできる |

<図 9-1 (A)～(H)>

全体：対象症例数 8577 名の中で不変群 5860 名を除いた，2717 名（31.7%）に変化がみられた。改善は 1610 回，退行は 2231 回発生し，改善は退行に比べて少なかった（改善/退行：-27.8%）。また，改善と退行の和（3841 回）を変化を起こした症例数で除すると，変化が平均で 1.41 回発生したということになる。改善が多くみられた水準は，2 群→3 群（1152 回，改善回数の 71.6%）であった。一方，退行に関しては，3 群→2 群（1529 回，退行回数の 68.5%）の変化が多くみられた。

年齢：改善群で多い 2 群→3 群では 30～32 歳にピークがあり，退行群で多い 3 群→2 群は 27～29 歳，2 群→1 群は 21～23 歳であった。口の開閉の改善は 30 代前半までピークがある一方，障害の重い程，より若い年齢で退行する傾向が認められた。

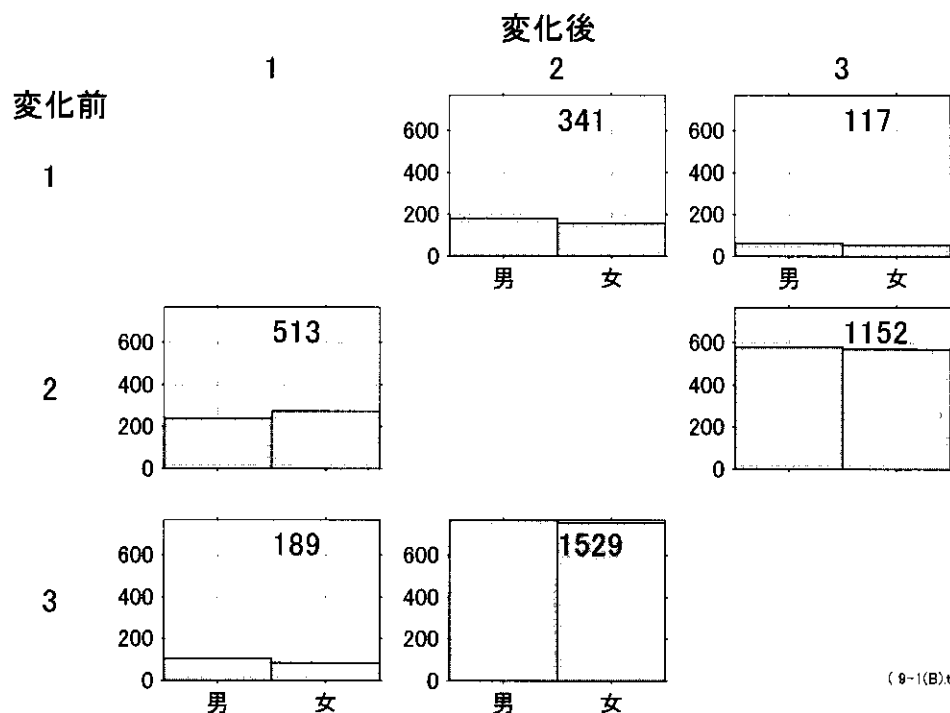
| | 変化後 1 | 2 | 3 |
|-------|-------|--------|--------|
| 変化前 1 | 471 名 | 341 回 | 117 回 |
| 2 | 513 回 | 958 名 | 1152 回 |
| 3 | 189 回 | 1529 回 | 4431 名 |

対象症例数 = 8577 名
 不変症例数 = 5860 名
 変化症例数 = 2717 名

改善変化回数 = 1610 回
 退行変化回数 = 2231 回

(9-1(A).txt)

図 9-1(A) 口の開閉：全体



(9-1(B).txt)

図 9-1(B) 口の開閉：性別

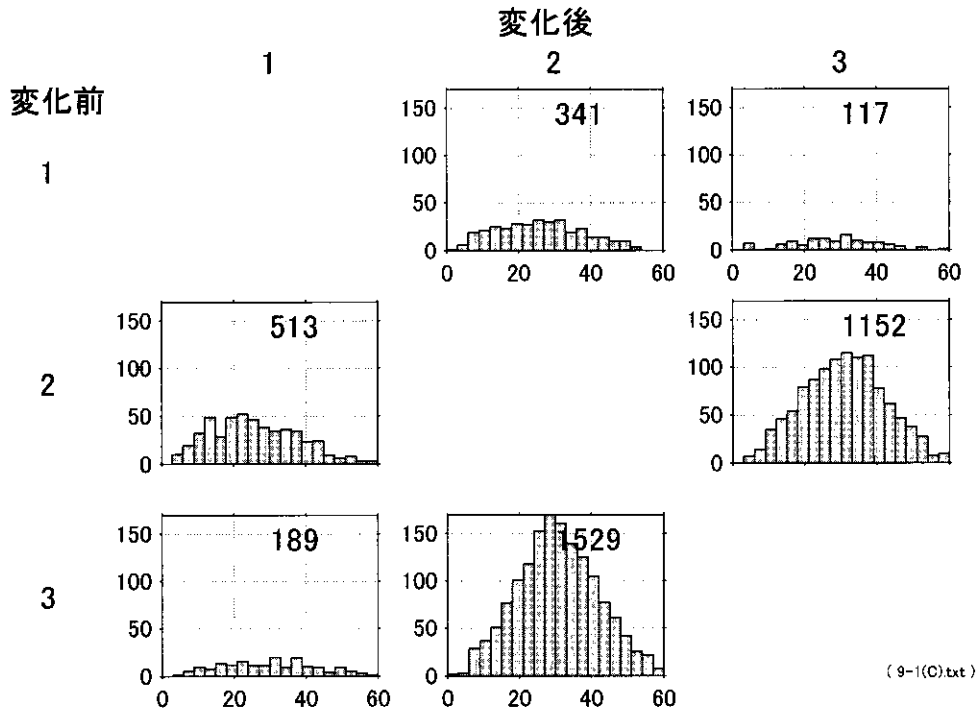


図9-1(C) 口の開閉：年齢（歳）

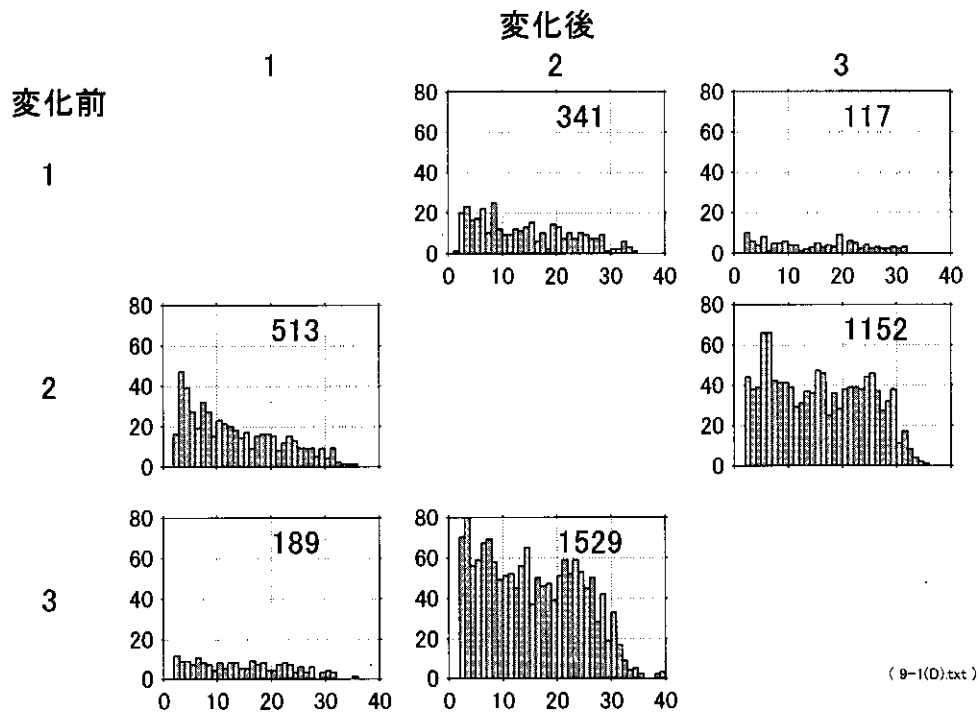


図9-1(D) 口の開閉：変化発生までの入所期間（年）

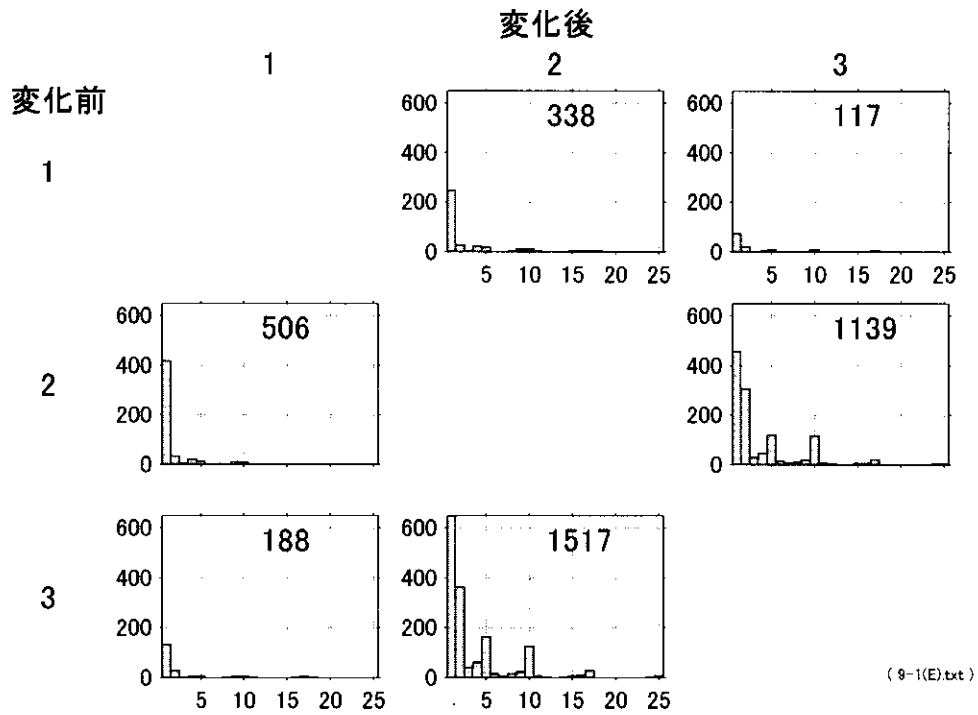


図 9-1(E) 口の開閉：大島の分類

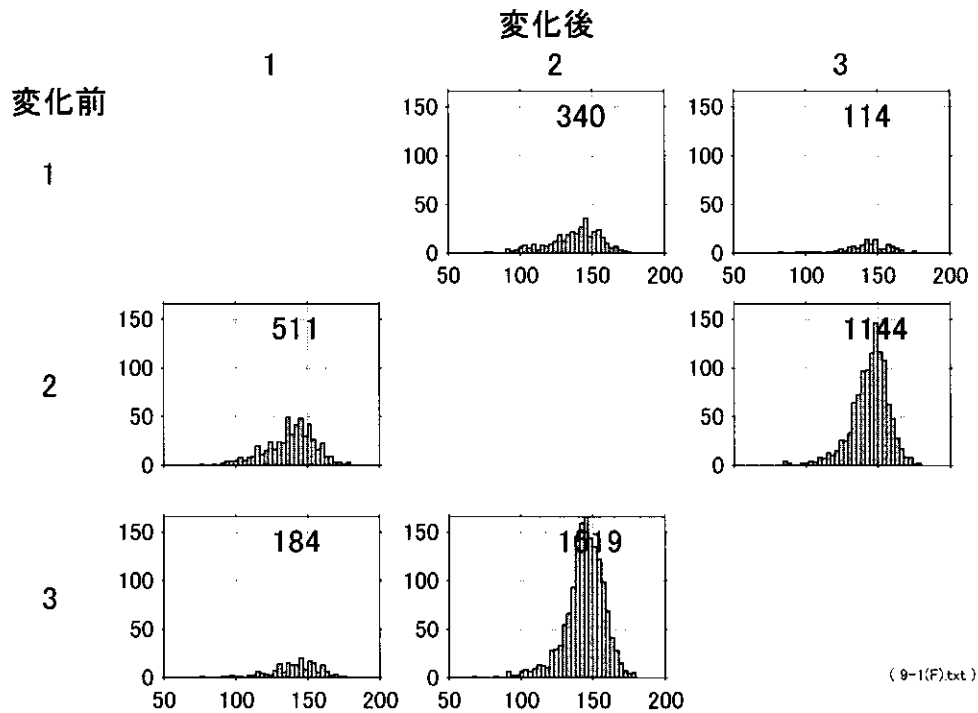


図 9-1(F) 口の開閉：身長 (cm)

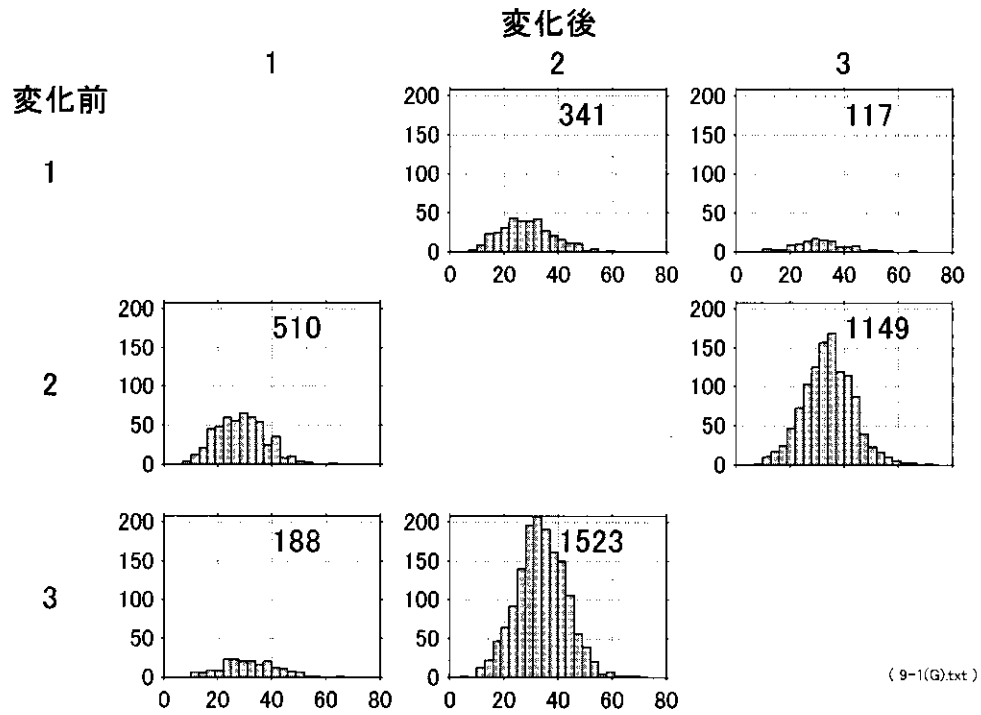


図 9-1(G) 口の開閉：体重 (kg)

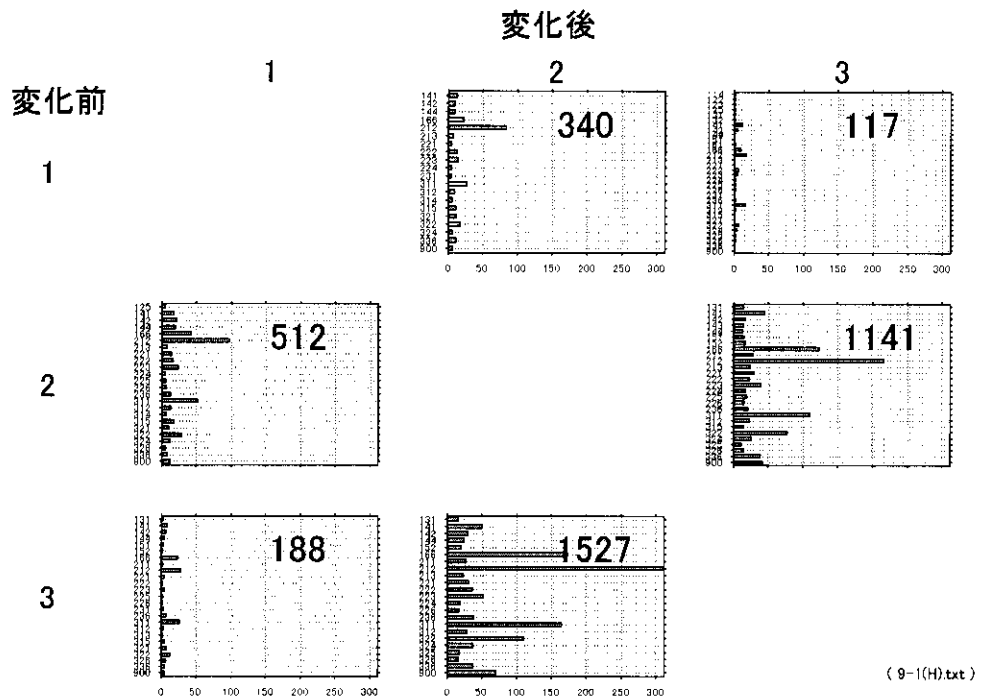


図 9-1(H) 口の開閉：主要病因

9.2. 咀嚼

■改訂版■

| | |
|---|--------|
| 1 | 非常に困難 |
| 2 | やや困難 |
| 3 | 容易にできる |

<図 9-2 (A)～(H)>

全体：対象症例数 8577 名の中で不変群 4972 名を除いた、3605 名 (42.0%) に変化がみられた。改善は 2267 回、退行は 2915 回発生し、改善は退行に比べて少なかった (改善/退行：-22.2%)。また、改善と退行の和 (5182 回) を変化を起こした症例数で除すると、変化が平均で 1.44 回発生したということになる。改善が多くみられた水準は、1 群→2 群 (914 回, 改善回数の 40.3%)、2 群→3 群 (1272 回, 56.1%) であった。一方、退行に関しては、2 群→1 群 (1090 回, 退行回数の 37.4%)、3 群→2 群 (1694 回, 58.1%) の変化が多くみられた。

年齢：改善群で多い 2 群→3 群は 36～38 歳に、1 群→2 群は 30～32 歳にピークがあり、退行では 3 群→2 群の 30～32 歳、2 群→1 群で 27～29 歳のピークであった。30 代前半で咀嚼が非常に困難であったものが改善し、30 代後半でさらに改善する傾向が認められた。一方、退行するものの中で、20 代後半に一段と退行の進む重症のグループがあることが示唆された。

体重：改善群では、2 群→3 群では 37～42 kg のピーク、1 群→2 群では 31～33 kg の順であった。退行群で多いのは、3 群→2 群で 40～42 kg、2 群→1 群で 28～30 kg の順であった。改善群と退行群での体重の差は、年齢に伴う体重の差を反映しているものと考えられた。

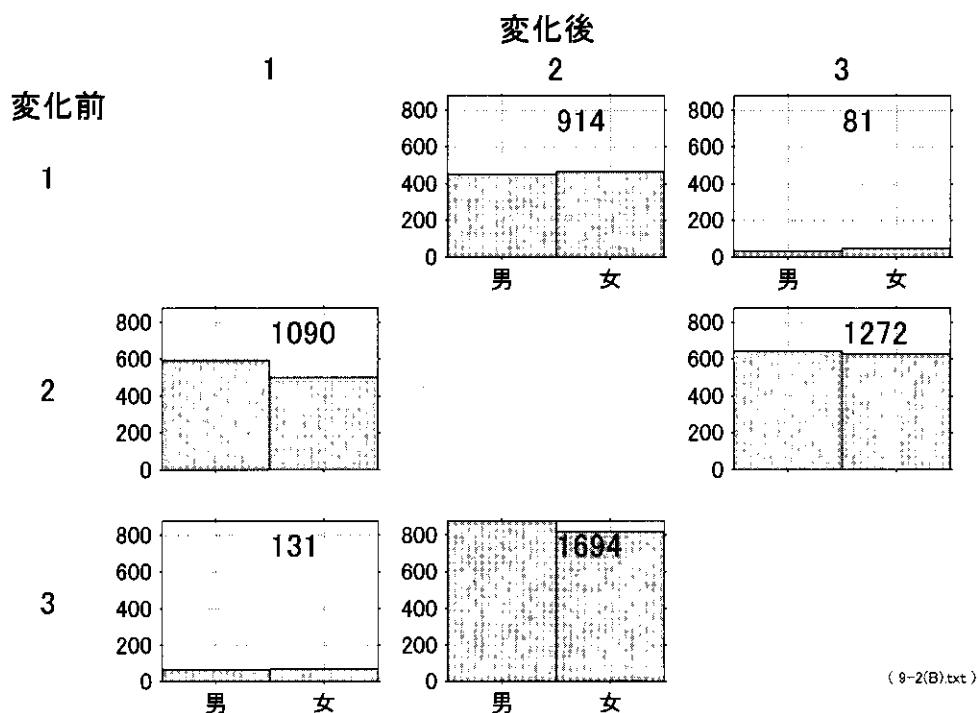
| | 变化後 1 | 2 | 3 |
|-------|--------|--------|--------|
| 变化前 1 | 1197 名 | 914 回 | 81 回 |
| 2 | 1090 回 | 1832 名 | 1272 回 |
| 3 | 131 回 | 1694 回 | 1943 名 |

対象症例数 = 8577 名
 不変症例数 = 4972 名
 变化症例数 = 3605 名

改善变化回数 = 2267 回
 退行变化回数 = 2915 回

(9-2(A).txt)

図 9-2(A) 咀嚼：全体



(9-2(B).txt)

図 9-2(B) 咀嚼：性別

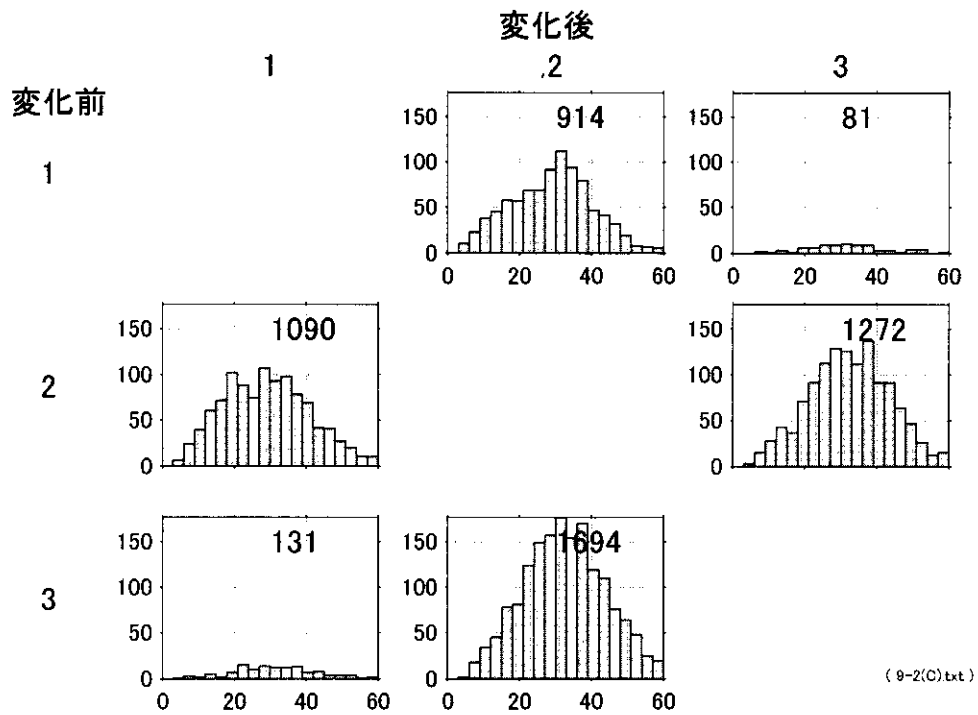


図 9 - 2(C) 咀嚼：年齢（歳）

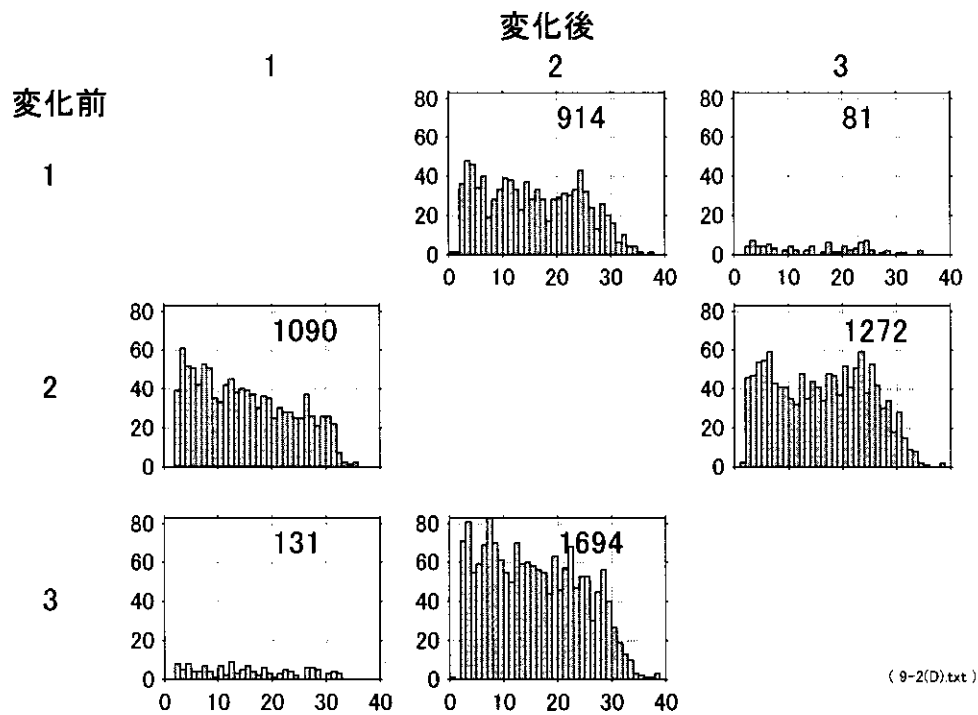


図 9 - 2(D) 咀嚼：変化発生までの入所期間（年）

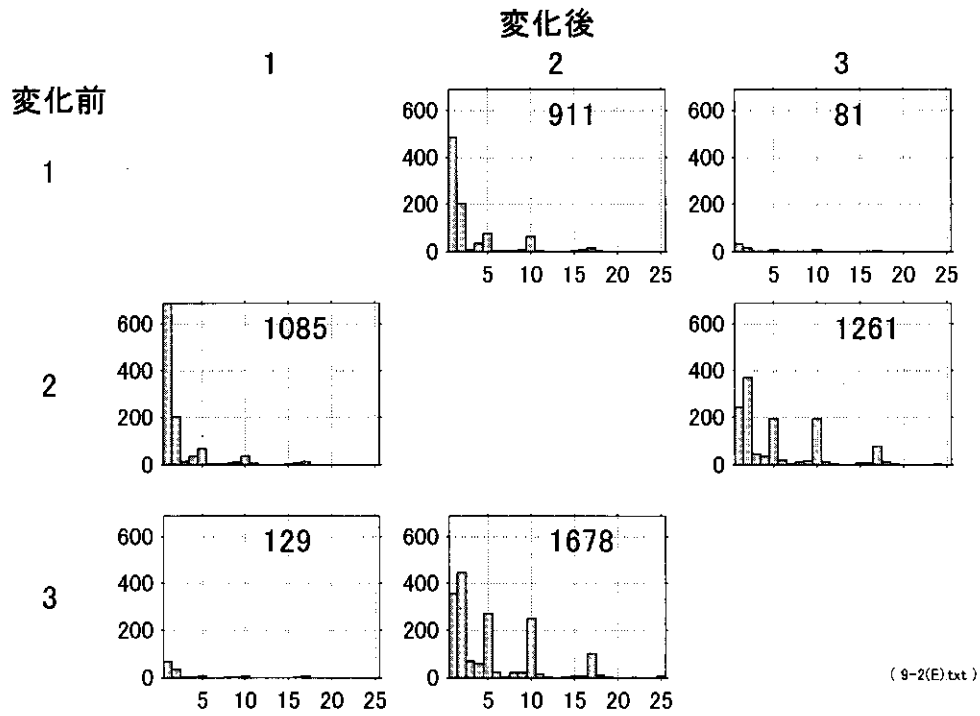


図 9 - 2(E) 咀嚼：大島の分類

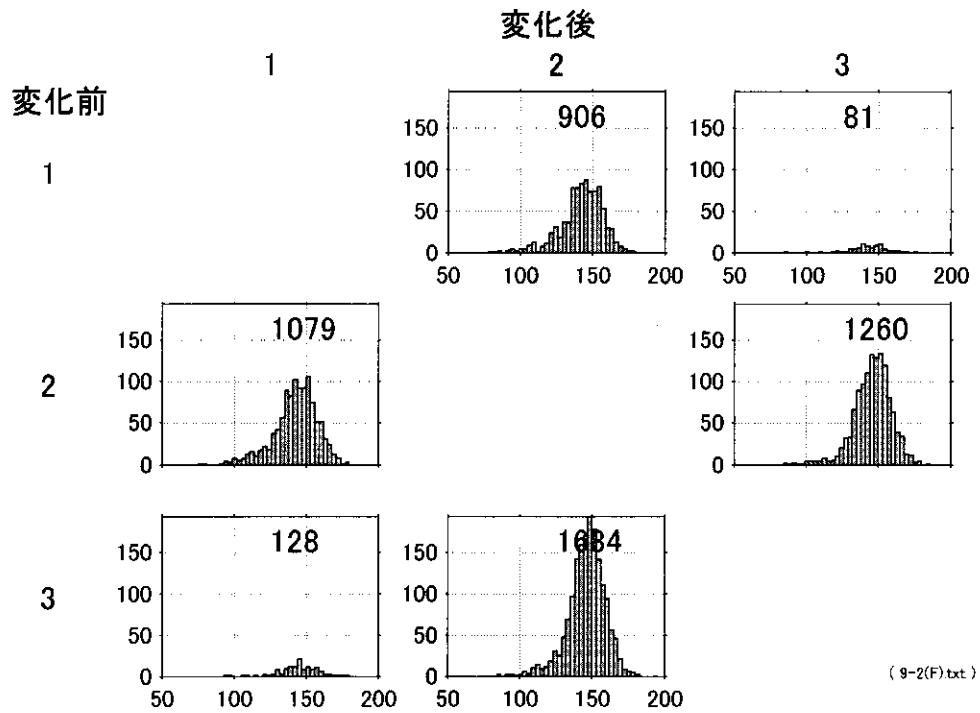


図 9 - 2(F) 咀嚼：身長 (cm)

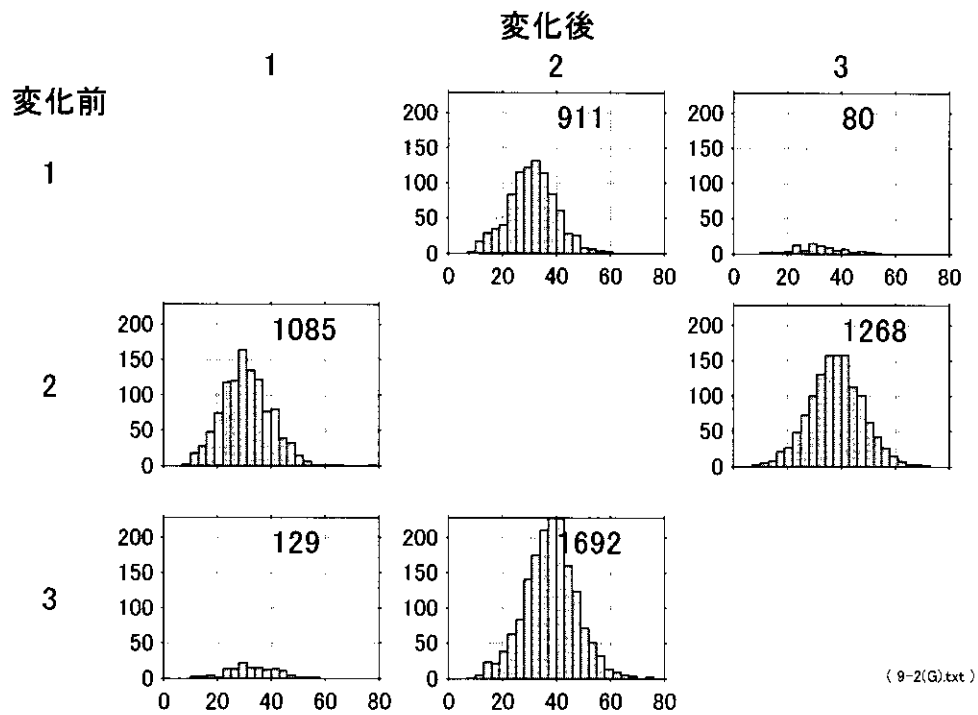


図 9 - 2(G) 咀嚼：体重 (kg)

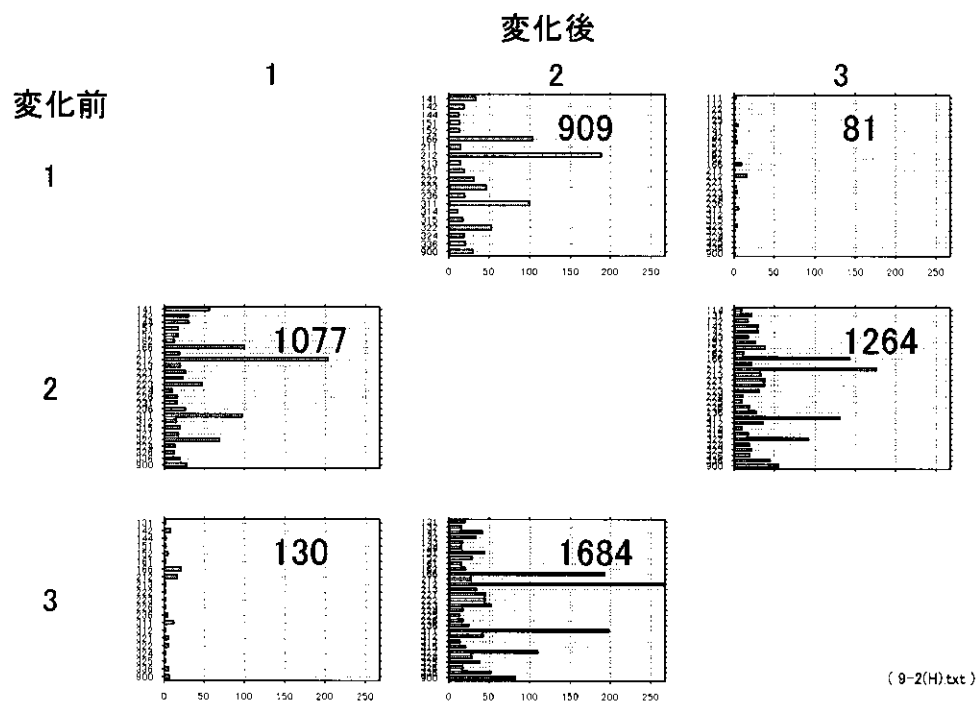


図 9 - 2(H) 咀嚼：主要病因

9.3. 嚙下

■改訂版■

| | |
|---|--------|
| 1 | 非常に困難 |
| 2 | やや困難 |
| 3 | 容易にできる |

<図 9-3 (A)～(H)>

全体：対象症例数 8570 名の中で不変群 5372 名を除いた，3198 名 (37.3%) に変化がみられた。改善は 1646 回，退行は 2767 回発生し，改善は退行に比べて少なかった (改善/退行：-40.5%)。また，改善と退行の和 (4413 回) を変化を起こした症例数で除すると，変化が平均で 1.38 回発生したということになる。改善が多くみられた水準は，1 群→2 群 (401 回，改善回数の 24.2%)，2 群→3 群 (1193 回，72.5%) であった。一方，退行に関しては，2 群→1 群 (752 回，退行回数の 27.2%)，3 群→2 群 (1890 回，68.3%) の変化が多くみられた。

年齢：改善群で多い，2 群→3 群は 36～38 歳に，1 群→2 群は 24～32 歳にピークがあり，退行では 3 群→2 群の 34～36 歳，2 群→1 群で 18～20 歳のピークであった。改善群では，重症のものは 20 代から改善のピークがみられ，30 代後半にさらに改善がみられる傾向があった。退行する場合は，重症のものは 10 代の終わりにピークがあるグループと 30 代半ばに退行するグループとに大きく分かれることが示された。

体重：改善群 2 群→3 群では 34～36 kg のピーク，1 群→2 群では 22～24 kg のピークであった。退行で多い 3 群→2 群では，40～42 kg にピークがあり，2 群→1 群で 22～24 kg にピークがみられた。改善群と退行群での体重のピークの差をみると，年齢による体重の差だけでなく，退行群では，体重の少ない傾向があった。

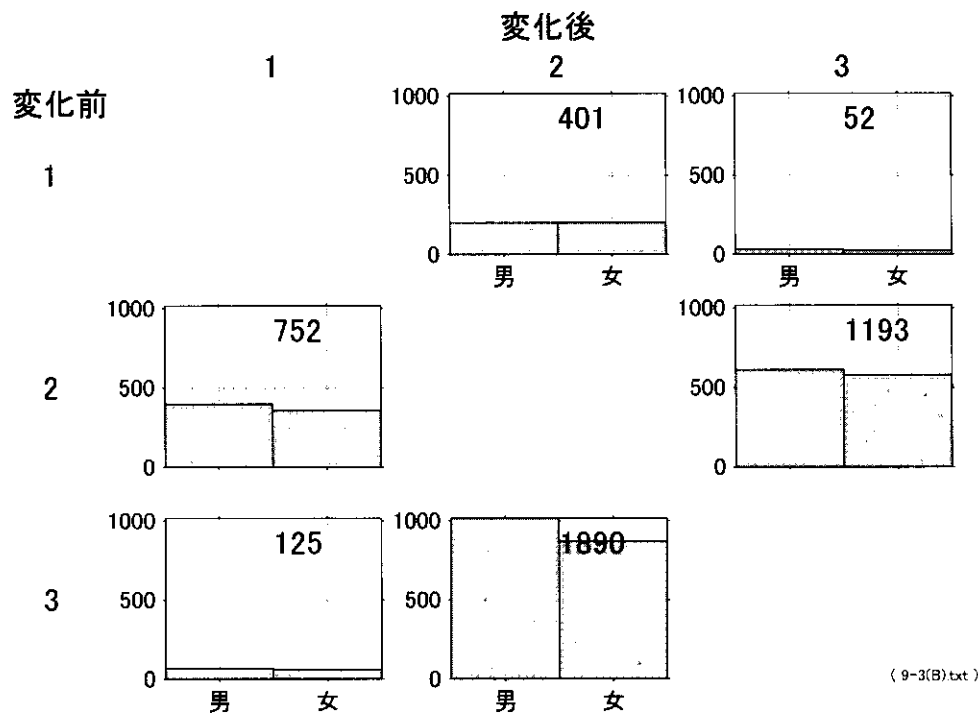
| | 变化後 1 | 2 | 3 |
|-------|-------|--------|--------|
| 变化前 1 | 697 名 | 401 回 | 52 回 |
| 2 | 752 回 | 1221 名 | 1193 回 |
| 3 | 125 回 | 1890 回 | 3454 名 |

对象症例数 = 8570 名
 不变症例数 = 5372 名
 变化症例数 = 3198 名

改善变化回数 = 1646 回
 退行变化回数 = 2767 回

(9-3(A).txt)

図 9 - 3(A) 嚙下 : 全体



(9-3(B).txt)

図 9 - 3(B) 嚙下 : 性別